

日本文学研究の魅力と喜び

—村上春樹と井原西鶴の作品を例として—

広嶋 進

1. 文学作品を読むことと研究すること

先日、新しくできたブックカフェに入ったところ、村上春樹の単行本がほとんど全部並んでいて、村上作品に関する評論も何冊か置いてあった。店主が春樹ファンなのだという。

諸君は、この店主のように愛読している作家はいるだろうか？好きな作家がいる人は、その作家の新刊本が発売されると、ただちに購入して読むことだろう。また、ひいきの作家がいない人でも、ベスト・セラーになって話題になっているからとか、友人に勧められたとかの理由で、小説などの文学作品を手にとって読むことがあるだろう。

このように我々は文学作品を日常生活における楽しみとして、あるいは様々な理由で読んでいるが、例えば、村上春樹作品を個人的な楽しみとして読むことと、それらの作品を研究することとはどう違うのであろうか？

2. 感想を述べることと研究すること

ある作品を読むと、読み手は何らかの感想を持つ。深く感動することもあれば、少しも面白いと思わないこともある。同じ作品でも人によって受け取り方が違うし、また同じ人間でも年齢によって、経験の有無によって、読後感が異なってくる。

作品に対する感想は年齢や経験によって相違するものである。したがって、原則的には「正しい感想」とか「間違った感想」というものは存在しない。読者の数だけ、あるいは読書の回数だけ、その都度異なった感想があり、そのいずれもが正しいと見なすべきであろう。

しかし、一方で、誤読というものも存在することも確かである。例えば、有名な例だが、「をかし」の解釈の例をあげよう。『枕草子』第一段には「雨など降るもをかし」とある。その部分を引用してみる。

夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。(第一段)

(現代語訳 夏は夜が素晴らしい。月の頃はもちろん素敵だ。暗闇の時もやはりいい。螢がたくさん飛び交っている時とか。またほんの一匹二匹なんかが、ほのかに光って闇の中に行くのも趣がある。雨などが降るのも○○○○。)

傍線部を「雨などが降るのもおかしくて、笑ってしまう」と解釈したならば、誤りである。「をかし」という語に「滑稽である」という意味は平安時代にもあったが、その外に「趣がある」という意味もあった。上の文章の場合、情趣のあるものを列挙してきて「雨など降るも」とあるのだから、「雨などが降るのも同様に趣がある」と解釈するのが、最適と考えられる。

ある一つの語は、その時代の語法の文脈（コンテキスト）のなかで使用され、またその作品の文脈（コンテキスト）のなかで使われている。テキストにおける語の意味は作品と時代のコンテキストにおいて決定されるのである。

『枕草子』が平安時代の随筆であること、平安時代には「をかし」という語に「①滑稽である②趣がある③愛らしい」などの意味があったという知識なしに、この段を読解することは不可能である。これまでの国文学や国語学の研究成果の助けを借りて、我々は古典のテキストを時代と文脈のコンテキストのなかで読むことが可能となる。

では、現代の作家である村上春樹の作品の場合はどうなのか？

3. 村上春樹作品を研究する

村上の使用する言語は現代日本語であり、同時代に生きる我々と同じ意味・用法において使われている。したがって、日本語を母語とする読者は、外国語を母語とする読者と比べて、作品の理解に際し言語上の障害はほとんどない。

とすれば、作品を読む際に、解説や研究書を参照する必要はないということになる。作者自身も次のように言っている。

僕は一冊一冊をただ一生懸命書いているだけなので、それが読者にどのように受け取られるかということまでは関与できません。(略)テキストというものは、いったん作者の手を離れてしまえば、どのようにも扱われ、解釈されるものです。(メールナンバー080、村上春樹『少年カフカ』新潮社、2003年刊)

村上には読者の解釈の自由を主張している。彼は自らの作品について、エッセイその他で少なからず発言しているが、「このように読んでほしい」とか「この作品のテーマはこれこれである」という言い方は慎重に避けている。読者の解釈の自由をあくまでも守っているわけである。すなわち各人がまったく自由に読み、解釈してよいのである。

となれば、村上春樹の研究書は不要であるという結論になりそうである。しかし、現在、大きな書店や図書館に行けば、春樹作品の入門書を始めとしてたくさんの村上春樹研究書が配架されている。これらの研究書は何のためにあるのだろうか。「あってもなくてもよい」書物なのであろうか。

村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』（1979年刊）を例にして、このことを考えてみよう。

本作品を一読すると、おおよそ「現在二十九歳になった〈僕〉が八年前の八月の十八日間の帰省先での出来事を振り返った手記」であることが分かる。しかし全体が40章の断片から成り立ち、筋が錯綜して曖昧なところが多く、よく分からないといった印象を受けるのではないだろうか。私も最初に読んだときは、軽やかな文体とアメリカ風の風俗や機知に富む会話がさわやかで好印象を受けるものの、なにやら筋が把握しきれないという感想を持った。だが折に触れ読み返したり、いくつかの論文や批評を読むうちに、この作品が二つの事件を奥に隠した、技巧的な作品であることが分かってきた。

まだ読んでいない人のために、隠されたストーリーを具体的に記すことをしないが、本作品の研究書の代表として、斎藤美奈子『妊娠小説』（ちくま文庫、1997年刊）、石原千秋『謎とき 村上春樹』（光文社新書、2007年刊）、加藤典洋『村上春樹 イエローページ』1（幻冬舎文庫、2006年刊）を挙げておこう。私はこれらの研究書を参照して初めて、『風の歌を聴け』という小説の筋を、隠蔽された事件を補いながら把握することができた。

さらに「風の歌を聴け」というタイトルが問題である。この作品名は明るく洒落た感じの題名であるが、作者はどんな意味をこめて命名したのだろうか。

ある時、作者自身のインタビュー（1985年）を読む機会があり、そこで題名について言及していることを知った。彼はこのタイトルは「トルーマン・カポーティの短編『最後の扉を閉めて』の末尾の一行「何も考えまい。ただ風のことだけを考えてみよう」によった」と発言していた。さっそく翻訳で『最後の扉を閉めて』（川本三郎訳『夜の樹』新潮文庫、1994年刊、所収）という短編を読んできた。

このアメリカ小説は『風の歌を聴け』とほとんど関係のない筋立ての小説であった。『最後の扉を閉めて』は、職場の人間関係に悩んだ男がニューヨークからニューオーリンズへと逃避行し、ホテルの一室で苦悩の果てに「何も考えないようにしよう」とつぶやく場面で終わる。村上はこの短編小説の内容ではなく、最後の一行だけをヒントにして題名を付けたようである。両作品を比較してみると、むしろ内容上の相違が際立つ。

『風の歌を聴け』には「死者」または「死」に関する記述が満ちあふれている。数えてみると「死者」や「死」についての記述は全部で51回にも及ぶ。一方、『最後の扉を閉めて』には「死者」や「死」に関する話題はない。「風の歌を聴け」という題名は「無常の風の歌を聴け」という意味でもあったのである。

このように、表面には表れないストーリーや題名の意味するところが、研究書や他作品との比較によって判明してくると、同じ作品が以前とはまったく違って見えてくる。

この事柄を知った人は村上のデビュー作を、通常言われているように「アメリカ小説の影響を受けた軽快な青春文学」として読むことはできなくなる。『風の歌を聴け』はある陰惨な事件を背後に暗示しながら、日本的な無常観をアメリカ小説の技法によって綴った独創的な作品として、新しい

相貌を現わすことになる。作品は読者の積極的な「読み」によって、絶えずその姿を更新するものなのである。

春樹作品は同時代の我々にとって言語上の障害は何もない。したがって「予備知識なしで虚心に素直な気持ちで読めば、それで十分である」と言う人がいるかもしれない。しかし、その態度は心掛けとしては立派であるが、それだけでは必ずしも十分ではない。

「作品を読む」ということは「作品（テキスト）」すなわち「織り上げられたもの（テクスチュア）」を解読するということである。それは織物の縦糸と横糸を確認しながら、その織り上げられ方を確認する作業である。そしてテキストが同時代のコンテキストのなかで、どのように関連付けられ、さらに先行するテキストをどう吸収しているかを見定める作業でもある。したがって読者の教養や経験の深浅により「虚心に読んでも分からない」テキストがある。

過去のテキストを読み解くためには、過去の時代的文脈（コンテキスト）を復元し、そのなかで読むための研究書や辞書や事典が必要である。このことは容易に理解できるであろう。同様にして現代のテキストを読むに際しても、読解のための研究書が作品によって必要になることがある。

古典であれ、現代文学であれ、両者のテキストとしての性格は本質的には同じである。

4. 研究の方法の実際 — 西鶴作品を例に

次に井原西鶴の作品を実例として具体的に作品を読み、作品研究をしていく手順を示してみよう。

このモノグラフを読んでいる諸君が、西鶴の作品に興味を持ったとする。例えば、高校の古典の教科書には『西鶴諸国ばなし』巻一の三「大晦日は合はぬ算用」が数多く採用され、掲載されている。諸君がこの「大晦日は合はぬ算用」を思い出し、西鶴作品を読み、また西鶴について研究してみたいと思ったとしよう。その場合、何からどう始めたらよいのであろうか？順を追って記してみよう。

①現代語付きのテキストを探す／あらすじを書く

『西鶴諸国ばなし』の原文と現代語訳の両方が載っているテキストをまず手にしてみよう。例えば、新編日本古典文学全集67『井原西鶴集』2、小学館、1996年刊、が現在刊行されている書籍のなかでは最適である。この小学館の古典全集では、上段に単語の注釈、中段に原文、下段に現代語訳が記されている。

高校時代に古典の得意だった人は「原文→現代語訳」、苦手だった人は「現代語訳→原文」の順に対照しながら読んでみるとよい。ただし、現行の訳文は仮のものとして読むことが大切である。これまでの「読み」を刷新することが文学研究の主たる目的なのであるから、現行の日本語訳はあくまでも参考訳として臨む必要がある。

各章を読み進みながら、ノートに各話の梗概を自分なりにまとめ、疑問点や感想を書き付けておく。論文のテーマはこれらのノートから生まれてくるはずである。

②いくつかの注釈書を読み比べる

続いて、注釈書を読み比べる作業をしよう。前記の小学館版にも上段に、語注や解説が記されている。この部分を細かく読んでいく。

例えば、「大晦日は合はぬ算用」は江戸の品川を舞台としているが、なぜ「品川」を舞台に設定したのだろうか？小学館版頭注に「品川」の注として次のようにある。

「東海道で、日本橋から二里（約八キロメートル）、第一番目の宿場。江戸の市中ではない。」

注釈者は現在の「品川」の文化的な意味と貞享期当時の文化的な意味の違いを記している。「品川」は現在は山手線の駅がある東京都内の繁華街であるが、当時は「江戸の市中ではなく」、「宿場」町であった。この話の主人公が江戸市中ではなく、江戸に最も近い「宿場」に住んでいるのは、零落の結果と考えられる。

前述したように、「テキストを読む」ということは「文化的なコンテキストのなかでテキストを読み解く」ことなのであるから、作品が書かれた時代の「文化的なコンテキスト」を復元しつつ、読み進まなければならない。

さらに、現代語訳は付されていないが、新日本古典文学大系76、岩波書店、1991年刊、がある。また最近では、『西鶴諸国はなし』三弥井書店、2009年刊、がある。

これらの注釈書を精読するときのコツは、出版された順番に留意することである。今紹介した三つの注釈書は次のような順に発行されている。

- (1) 日本古典文学全集39、小学館、1973年刊→新編日本古典文学全集67、小学館、1996年刊
(この書は96年の発刊だが、73年版の再刊本であり、内容はかつての注釈をほぼ踏襲している)
- (2) 新日本古典文学大系76、岩波書店、1991年刊
- (3) 『西鶴諸国はなし』三弥井書店、2009年刊

(1) に挙げた小学館の新編日本古典文学全集（1996年刊）は再刊本なので、(2) の岩波版（91年刊）よりも古い注釈であることに気を付けよう。

「新刊の注釈書には新しい注釈と読解が記されていないなければならない」——このことは注釈書を出版する者の原則である。よって、新しい注釈書に「何かが加えられたか」を注意深く比較しながら読み進む必要がある。

③研究史を読む

次にすべきことは最も新しい「研究史」を手にして、これまで本作に関してどのような研究がなされてきたかを概観することである。幸い、『諸国ばなし』については宮澤照恵の「作品の研究史」がある（『西鶴と浮世草子研究』1、笠間書院、2006年6月）。ここでは三段組み、4ページに渡って「作品概要」「研究史（昭20以降）」「課題と展望」が詳細に記されている。これを読むことによって戦後、本作を巡って何が争点となってきたかが一覧できる。宮澤の総括によって〈咄の方法〉〈典拠

研究と方法の解明)〈成立・構想論〉の各項目に関して様々な論争があったことが分かる。

研究史がまとめられていない作品の場合は、面倒だが、自分で作品研究の流れを把握することになる。そのためには『西鶴事典』(おうふう、1996年刊)所収の「研究文献目録一覧」から、当該作品に関する論文等を書き抜き、個々の論文を読む作業をしなければならない。

一方、西鶴研究の全体を把握するには、いくつかの入門書を活用するのがよい。次の二書を紹介しておこう。

谷脇理史・西島孜哉編『西鶴を学ぶ人のために』世界思想社、1993年刊

谷脇理史編『西鶴必携』学燈社、1993年刊

また最新の研究論文を見るにはインターネットを活用しよう。「国文学研究資料館」にアクセスして「データベース」→「国文学論文目録データベース」→「西鶴諸国ばなし」で検索してみよう(2010年現在、三年前の論文を最新論文として本作について51件の論考がリストアップされる。これに基づいて新しい論文をチェックすればよい)。

④研究書及び研究論文を読む

③によって西鶴研究の主要研究書や『諸国ばなし』の主要な論文が把握されたはずであるから、それをメモを採りながら読んでいく。

戦後の西鶴研究を代表する研究書は暉峻康隆『西鶴 評論と研究』上・下(中央公論社、1948年、50年刊)、谷脇理史『西鶴研究序説』『西鶴研究論攷』(ともに新興社、1981年刊)である。これらをまず読了することである。

研究論文については、「研究史」で強調されている重要な論考を先にいくつか読むこと、その次に最新の論文を読むことがポイントとなる。

最新論文に注目する理由は、学術誌に掲載された論考ならば当然審査を受けており、必ず新しい知見と読解が展開されているはずだからである。

⑤新しい「読み」を模索する／問題点を見つける

この⑤の項目が最も大事で、最も難しい。

新しい「読み」を発見し、提出することが、文学研究の最終目的であるが、「新しい」読解を提示するためには、これまでの「古い」読みを網羅的に全て知った上で、独創的な見解を提出しなければならない。

新しい「読み」を提示するのに最も単純で正統的な方法は、すでに存在する争点を利用し、どちらかの側に立つことである。

例えば、「大晦日は合はぬ算用」に関して、先の①で紹介した『西鶴諸国はなし』(三弥井書店、2009年刊)の「鑑賞の手引き」(南陽子)では、本話の末尾を巡って二つの対立する見解を紹介している。

本話は「あるじ即座の分別、座なれたる客のしこなし、かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし。」と終わる。この末尾について、武士を「批判」する町人作家・作家の視点を見る読み方（A）と、義理を重んじる人心の機微に「共感」する読み方（B）の対立が説明されている。

このように、これまでの「研究史」において争点となっている事項があり、それについて新しい論拠とともにA Bどちらかの読みに決着を付けることができれば、論争に終止符を打つことができる。また、A Bのいずれでもない、Cの解釈を論拠とともに争点に対し提出することができれば、新しい解釈が成立することになる。

しかし最も望ましいのは、これまでにない視点から新しい「問題点」を見つけ出し、その箇所についての解釈を提示し、本章あるいは本作品全体に及ぶ問題提起をすることである。

この新しい問題提起の最新の例を紹介しよう。杉本好伸は「「大晦日は合はぬ算用」について考える」（『西鶴と浮世草子研究』3、2010年5月）でこう述べている。

本話では「小判が重箱の蓋にくっついた状態で台所にまで運ばれていた」と記されているが、杉本はこの点に疑問を呈し、貨幣博物館で現物を実見しつつ、小判が重箱の蓋に湯気でつくことはあり得ないと判断する。そして湯気ではなく、主人の内助が小判を蓋の上にうっかり置いたために紛失事件が起り、以下の騒動が起こったと全体を解釈する。そしてそのことを前提として本話全体のテーマや「読み」へと論旨を拡大していく。詳細は省略するが、細部の検証から全体の「読み」へと展開しつつ、旧来の「読み」の変更を迫った好論文である。

5 文学研究の成果

文学研究は、このように最終的には作品の新しい解釈、深い「読み」を探究するものである。音楽作品において、同じ楽譜を楽譜通りに演奏しても、演奏家によって幾通りもの演奏があるように、文学作品も幾通りもの「読み方」があつてよい。そして、楽譜の研究、古楽器の研究、音楽家の伝記研究が、現代の演奏家の演奏に多大な影響を与えるように、文学研究の成果は、読者が作品を「読む」という行為に大きな影響を与えるのである。